

哲 学 科

パンデミックと文学部

史 学 科

遠近を組み換えてみる

哲学科 杉山直樹教授

「ソーシャル・ディスタンス」と言われます。距離をとれ、「密」になるな——しかし、哲学においては、実は、そんな「距離」自体に大した意味はありません。そもそも「遠い／近い」というのは、物理的距離だけを意味するのではないのです。いくら物理的に近くても「遠い」ものはあり、逆に、離れていてもずっとそばにいる存在だってあります。何を自分の近くに置くか、自分を何の近くに置くか。本当に大事なものは、これです。

現在のとまどいは、感染症をきっかけにして、これまでの「遠近」を組み立て直す必要から生じているように見えます。この組み直しには、ちょっと寂しいこともあります。でも、あまり意味のない「近さ」を押しつけられていたことにも気づかされる。学校では、孤立しないようキョロキョロしていなければ。同じ部署だから飲み会に付き合わねば。——いや、そんな「近さ」はそんなに重要だろうか？組み換えのチャンスとも言えます。

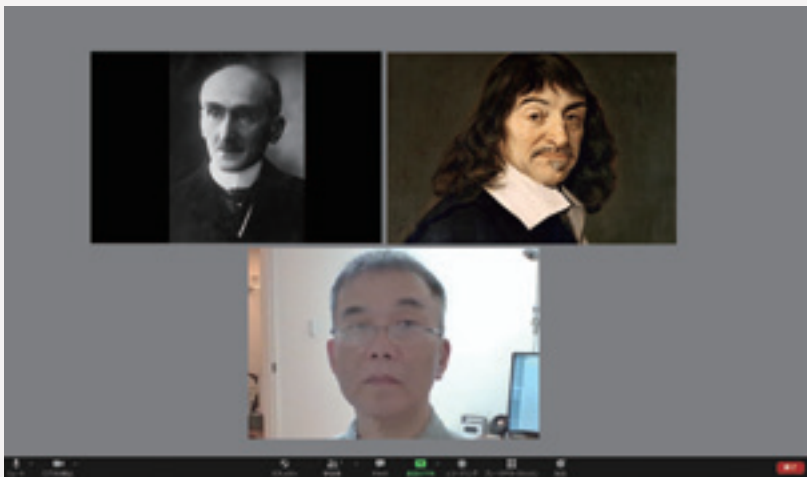
哲学を勉強する一つの面白さは、とてつもなく「リモート」な相手まで、自分の隣人にしてしまえることです。遠いはずの哲学者や思想家も、こちらが一定の構えでつき合っていけば、十分に「近い」存在にできる。日常から遊離せよということではありません。遠くの賢人を自分の傍らに招くことで、せわしない日々も、もう少しゆったり厚みを持ったものにすることができる。不便なことも多いこの頃ですが、反対に、そんなことも再確認しています。

COVID-19と美術館

哲学科 島尾新教授



「古典×現代2020—時空を超える日本のアート」展 展示風景 国立新美術館
「仙厓×菅木志雄」©Kishio Suga 撮影：上野則宏



左上：アンリ・ベルクソン、アメリカ議会図書館のサイト <https://www.loc.gov/pictures/collection/ggbain/item/2014718527/>
右上：ルネ・デカルト、オランダ美術史研究所(RKD)のサイト <https://rkd.nl/en/explore/images/181018>

コロナの感染拡大とともに、美術館は閉まってゆきました。世界中で起きた現象ですが、美術館は「密」な空間で、そこへ行くのは「不要不急」であるという、日本に特有の雰囲気もありました。

実は美術館は、感染リスクの低いはずのイベント会場です。「密閉空間」とはいても、おしなべて天井は高くて換気もよく、語り合うにしても声は小さく「対面度」も低い。人々は作品の前に佇みながらも動きまわっているので、見知らぬ二人が長時間寄り添うことはまずありません。「ソーシャルディスタンス」のとれる空間なはずなのです。

より根本的なのは「不要不急」の方で、ドイツではモニカ・グリュッタース文化相が「アーティストは生命維持に必要不可欠な存在」と発言して注目されました。大げさに聞こえるかも知れませんが、展覧会が再開しだした去年の夏、国立新美術館で古美術と現代美術に（写真）、また銀座の画廊で閑かに絵に取り巻かれて、ほんとうに生き返った気がしました。熱心に「作品鑑賞」をしなくとも、アートの散りばめられた場にいるだけで。人には「自然」とともにこのような空間が必要なのでしょう。

こういう時期には——ミシェル・ウツカーのグレー・リノ (Gray Rhino) とは向き違いますが——平常時には気にしないこと、無意識に蓋をしていることが顕在化・前景化します。「経済とグローバリズム」一辺倒では上手くいかないという、言い古されたことを実感しながら、美術とその歴史に思いを巡らせる。「入館待ちの行列のできる展示会が成功」という考え方を見直して、落ち着いた美術の見せ方を考えてゆくことが必要でしょう。

感染症と歴史学

史学科 千葉功教授

ふだん歴史学を勉強していると、なんでも歴史的に見ようとする癖というか習性が身につけてしまいます。私の専門は日本近代史なのですが、「パンデミック」というと「スペイン風邪」の流行がすぐに思い浮かびます。今からちょうど100年前の1918-21年、第一次世界大戦直後の日本を襲ったインフルエンザ。有名人では島村抱月や辰野金吾などが亡くなっています。

日本において「歴史人口学」という学問分野を切り開いてきた速水融氏は、スペイン風邪が世界人口20億中2000-4500万（1-2.25%）の死者を出した最悪のパンデミックであるにもかかわらず、日本語の研究書が皆無に近いことに気づきます。そこで研究を決意し、2006年に刊行したのが『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』という本です。過去のことであれば、すべてが歴史学の対象となりうる。それが歴史学の魅力でしょう。

21世紀に入ってSARS（サーズ）、MERS（マーズ）、新型インフルエンザ、そして今回の新型コロナ・ウイルスといったように、新興の感染症が相次いで人類に襲来する事態が起こっています。歴史学は直接役立つことはないけれど、事態を歴史的に見ることで、客観的な視点が得られます。そして、このような視点は社会を生きぬいていくうえで必要なことと考えます。文学部の存在意義がますます高まると言ってよいのではないのでしょうか。

黄昏に歩く

史学科 工藤晶人教授

カミュの小説『ペスト』が大変な勢いで売れているそうです。当時はフランス領だった20世紀半ばのアルジェリアを舞台として、ある港町を襲った感染症に立ち向かう人々の群像劇です。コロナ禍に混乱する現代の世界を彷彿させるものがあるというので、多くの読者を惹きつけているようです。

ところで、この小説の舞台となったオラン（ワフラーン）という港町は、小説のなかでこれといった美しさも特徴もない町として描かれています。カミュはオランがあまり好きでなかったという説もあるのですが、それはさておき、実際に訪れてみればさまざまな発見があります。私がはじめてそこを訪れたのは2000年代、内戦の記憶が生々しい頃でした。そうした緊張感のなかでも、オランには独特のゆったりとした空気が流れていたことを思い出します。起伏に富んだ港町には、ほかにない魅力がありました。

家のなかにいる時間が増える昨今ですが、書物と映像だけで満足するべきではないでしょう。出不精な筆者が自戒を込めて記すことですが、自分の足で現地を歩いてみることは大切です。歴史家ブローデルが言ったように、私たちの目の前で起きている数々の事件は、長い目で見れば「歴史の表面の波立ち」かもしれませんが。黄昏のなかで一步をふみだしてみましよう。そうすれば、目にするもののなかに時代を超えて変わらぬものを感じ、やがてくる夜明けをさらに明るく感じるきっかけをつかむことができるはずですよ。



『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界戦争』
速水 融(著) 藤原書店



日本語日本文学科

パンデミックと文学部

英語英米文化学科

文学はきっと、 あなたに愛を教えてくれる

日本語日本文学科 赤坂憲雄教授

あなたは太宰治という作家が好きですか。わたしは二十歳のときに、ひとりの友人から、「お前のような、太宰のわからぬ奴とは絶交だ」と言い渡され、ほんとうに絶交して以来、太宰がずっと嫌いでした。太宰との再会を果たしたのは、それから三十年も経ってからのことです。

太宰は優しさについて問われ、人を憂うことだと答えています。あるいは、故郷に贈る言葉をもとめられて、「汝を愛し、汝を憎む」と応じています。その数年後、『津軽』という傑作のなかで、わたしには専門科目があって、それは世の人がいう「愛」であり、「人の心と人の心のふれあいを研究する科目である」と書いています。愛というのはむろん、男と女のあいだの恋だけではなく、人と人とが触れあい、傷つけあい、好いたり嫌ったりすることの、その周辺をふくめたすべてを意味しているはずです。だとすれば、この愛こそが文学の得意とする専門科目かもしれません。

ところで、突然の愛ならぬ、コロナ禍にもてあそばれているわたしたちは、まったく理不尽なことに、恋愛や友情の機会を奪われ、禁じられるという思いも寄らぬ状況を生かされています。

小池昌代さんという詩人の、「抱擁」と題されたエッセイに出会いました。

緊急事態宣言の下、買い物のために外に出たときのこと。詩人は書いています、「降り注ぐ太陽の光。マスクをつけたヒトが歩いている。地上は虚無的で、不思議なよそよそしさに満ちている」と。なぜ、人間や人ではなく、ヒトなのか。数週間ぶりに外出したわたしもまた、からっぽの街、そこをゆき交う「マスクをつけたヒト」とすれ違う瞬間の、「不思議なよそよそしさ」を思い出します。それから、しばらく「距離」について触れたあとで、唐突に、コロナ禍の終わりの象徴的な風景は、「ヒトとヒトとの抱擁」である、という言葉にぶつかります。詩人はさらに、生の不確かさのなかを手探りで歩いている、寂しく孤独な存在について語っています。

エッセイの終わりに近く、転調のときに不意に訪れます。百人一首の、二条院讃岐の詠んだ、〈わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし〉という歌が引かれます。詩人はそれを、「あなたは知らないでしょう。わたしの袖は、あなたを思って涙で濡れたまま乾くことがない。ちょうど潮が引いたときも、海水をかぶってずっと濡れたままの、遠い沖に眠る石のように——」と読みほどこいています。ヒトが人へと変身を遂げる瞬間でした。詩人は、歌われた恋にではなく、遠い沖合の一個の石に想像力を飛ばす、その、かぎりなく人間的な、また文学的な営為に心を震わせています。

その小石はいつしか、海の底の小さなラジオにすりかわります。詩人はこんなかすかな声に耳を澄ましています。〈世界は終わったわけではない、抱擁できる日がきっとやってくる、想像せよ〉と。

なんとも魅力的な、励ましに満ちたエッセイです。抱擁のときを、ともに迎えるために、歩きつづけることにしましょう。



魔術と劇場

英語英米文化学科 荒木純子教授

ダンス鑑賞は私にとって趣味と研究を兼ねています。今回のパンデミックにより全世界で公演中止となりましたが、代わりに海外有名ダンサーのレッスンがオンラインで受けられて感動しました。無観客の舞台映像配信もあり、思い出したのはかつて研究した17世紀アメリカの魔術、悪魔憑き現象です。文化研究では残されたことばを吟味するのが基本です。観察記を読むと、取り憑かれた少女と見守る人々との相互作用が浮かび上がりました。人々と少女の中の悪魔との「対話」は、人々と少女による悪魔の「創出」だったのです。これはまさに劇場効果といえましょう。魔法のように私たちを魅了する舞台、ダンサーと観客がともに創り上げる最高の舞台が早く日常に戻ってきますように！



ニューヨークのメトロポリタン歌劇場を拠点とするアメリカン・バレエ・シアターのシーズン。（筆者撮影）

いたわりと伝達

英語英米文化学科 平田一郎教授

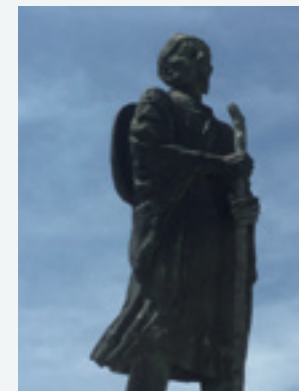
私は言葉によってどんな意味がどのように伝わるかを研究しています。私たちはすべてを言葉にしていまわなくても、いろいろな意味が何となく伝わることを知っています。そして多くの場合、すべてを言葉にしていまわれないことで聞き手の気持ちをいたわることができます。しかし、伝えたい内容を言外の意味に任せると、その分だけ伝わる内容が不正確になります。この非常事態にあって、聞き手への配慮より情報伝達の正確さを優先すべき場面があると思います。「咳エチケットを守りましょう」というと聞こえがいいですが、「咳やくしゃみをする際、マスクやティッシュ、ハンカチなどを使って、口や鼻をおさえてください」といったほうが正確ですね。



Bashō in Lockdown

英語英米文化学科 アンドルー・フィッツサイモンズ教授

For the last few years, I have been working on a translation into English of Bashō's complete haiku. The coronavirus crisis has made me see the poems in a new light. In our teaching, even if online, and in our work as researchers, we maintain the channels of hope. Hope needs nurturing. The ending of Lu Xun's story 'Hometown' comes to mind, where hope is compared to a path across the land, which only comes into being when lots of people go the same way. Most of modern life seems geared towards dulling us to what literature and the coronavirus remind us, that we are all implicated in each other's fate, that the tiniest action can be of the most enormous consequence. And so back to Bashō I go... 瘦せながらわりなき菊のつばみ哉



伊賀鉄道上野市駅前立像

『ヴェニスに死す』を 生き延びる

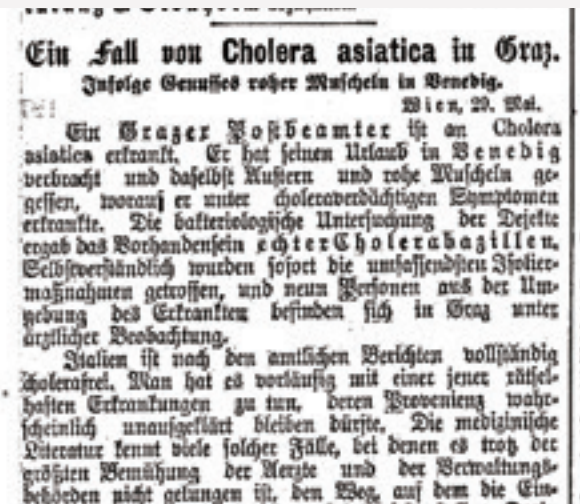
ドイツ語圏文化学科 伊藤白准教授

コロナ禍において読むドイツ文学と言えば、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』（1912年）を挙げないわけにはいかないだろう。1911年5月下旬から6月頭にかけてヴェニスに滞在したマンが、ちょうど時期を同じくして始まったヴェニスのコレラ流行に着想を得て書いた中篇で、ヴィスコンティの映画でも知られるマンの代表作の一つだ。貴族の称号を与えられた初老の作家グスタフ・フォン・アッセンバッハが、気まぐれな旅行で滞在したヴェニスで、ギリシャ彫刻かと思紛う美少年タッジオに心を奪われ、市中にコレラが蔓延することを知りつつ滞在を引き延ばし、羞恥心を忘れて少年を追いまわし、その美を堪能しながらコレラに感染して死亡する。克己を是とし品格と名誉を重んじてきた人間が、美という名の死神に魅入られ、死へと駆り立てられる狂気。この「死への共感」は、マンの初期の作品にしばしば現れる重要なモチーフである。

ただ、読み返してみるならば、この作品を書いている作者マンの姿勢には、どこにも「死への共感」らしきものは感じられないことに気づくのではないだろうか。「ヴェニスで何日か休暇を過ごし、故郷の町に帰って明らかな兆候を示して死んだ」という「オーストリアの田舎から来た男」の話が作中で新聞報道の内容として紹介されるが、これはオーストリアのいくつかの新聞の5月29日の記事に掲載され、その後6月のドイツ語圏の新聞をにぎわせたグラーツ出身の男の情報をマンが追っていたことを示している。あるいは物語中では、コレラが流行り始めていることは外国人には隠蔽されるが、それは「つい最近始まった絵画展への配慮」や「パニックが起きたり悪評が立ったりした場合にホテルや商店やあれこれの外国系産業が脅かされることになる莫大な損害への配慮」が「真実への愛や国際協定の尊重よりも強い」ためだった。100年前の作品でありながら、命と経済が秤にかけられる現在の世界を知っているかのような描写である。ある研究によれば、『ヴェニスに死す』は、1911年のヴェニスのコレラについての最も優れた情報源と言えるという。死の美学に魅入られて死にゆく主人公をよそに、マン自身はむしろ生に執着し、どん欲に情報収集を行い、生命の危機に直面してなお旺盛な人間のエゴイズムを見つめ、それを作品化したのだ。

言うまでもなく、主人公アッセンバッハと異なりマン自身は感染症にはかからずこの災禍を生き延びた。第一次世界大戦を経て保守的なナショナリストから反ファシストへと転向したマンは、ナチスが政権を取るとスイスへ、そしてアメリカに亡命し、(感染症ではないが)飢饉から人々の生命を救う『養う人ヨセフ』（1943年）の物語を描くことになるのである。

コロナ禍においてこそ、歴史を知り、情報を収集し、耳に心地よい言葉を疑い、他者への想像力を広げることの重要性は疑えない。それを教えてくれるのは、まさに文学だと思う。



ヴェニスのコレラを報じた『ノイエ・フライエ・プレッセ』の1911年5月29日の記事の一部



左から
●ルキノ・ビスコンティ(1971年)『ベニスに死す』(原作:トーマス・マン)ワーナー・ホーム・ビデオ
●トーマス・マン(2007)『ヴェネツィアに死す』(岸美光訳)光文社古典新訳文庫
●トーマス・マン(1939)『ヴェニスに死す』(実古捷郎訳)岩波文庫

ペストを病む動物たち

フランス語圏文化学科 志々見剛准教授

パンデミックという色々な文学作品が思い出されるけれど、フランスのもの一つ挙げようと思うし、あんまり陰惨でないのにしたいです。

17世紀フランスの詩人ラ・フォンテーヌの『寓話』に、「ペストを病む動物たち」というのがあります。

悪疫が動物たちを襲い、王たるライオンが皆を集める。「この災禍は我々の罪科に対する天罰だ。最も罪深い者を犠牲に供し、これを祓い清めなければならぬ。」率先垂範、彼は重々しく懺悔する。「俺は食欲のままに羊たちを、さらには羊飼いをも貪り食ったことがある」、と。

ここでキツネがしゃしゃり出る。「いえいえ、羊どもは陛下に喰らわれることこそ誉れ、それに羊飼いのごとき不逞の輩は物の数にも入りません。」かくしてライオンの所業は不問になり、居並ぶ他の肉食獣たちも拍手喝采。

最後に、ロバがおどおどと告白する。「坊さんたちの草場を通りかかったとき、空腹のあまり、一口齧ったことがございます。」とたん、一座は憤激してこの大罪を糾弾、ロバは直ちに絞首刑となった。寓話はこう結論する。「あなたが権力者か惨めな人間かによって、法廷の判決は白にも黒にもなるだろう」。

いや、作者は澄ましているが、狂言回しはキツネでしょう。強者に阿り、巧言を弄して黒を白に変える。悲しい哉、こんな手合いはいつだって後を絶たないのです。病気も怖いですが、それに直面して右往左往する人間同士のやり取りのほうが、もっと恐いかもしれません。ロバにはなりたくない。でも、それ以上に、キツネになるのはごめんこうむりたいものです。



ラ・フォンテーヌの肖像(1690)(モンセラート博物館)



ギュスターヴ・ドレの版画(1868)(フランス国立図書館)

人間中心主義の忘却に抗う

フランス語圏文化学科 中条省平教授

私は2年前にNHKテレビの「100分de名著」という番組で、フランスの作家アルベール・カミュの小説『ペスト』を解説しました。

そして今年、新型コロナウィルスが猛威をふるうと、カミュの小説に描かれた出来事や省察が今回の疫病流行にあまりにもよく当てはまるということで、『ペスト』があらためて世界中でベストセラーになりました。

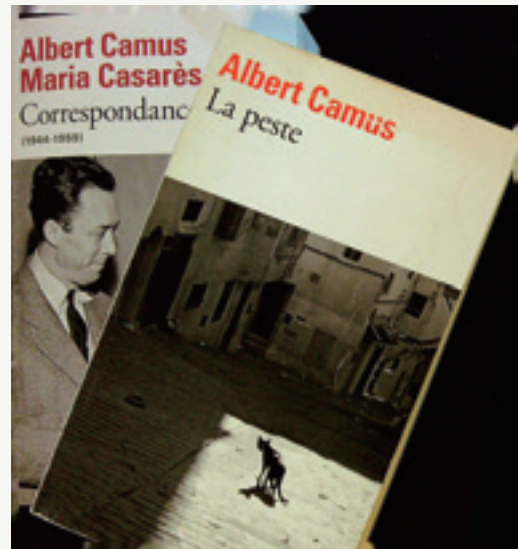
そのため、私の解説した番組も再放送になり、2年前以上の反響を呼びました。

たしかに『ペスト』の迫真性と面白さは驚異的で、小説の至るところで、今回のコロナ禍がもたらした大小様々な事件を予言しているように思えます。また、カミュがそこで説いている「明るく見きわめること」の重要性や、人間の自己中心性への批判は、非常な説得力をもって伝わってきます。

カミュは、世界の不条理に反抗するのに人間の連帯が必要だと説いたのですが、今回のコロナ禍では、連帯のための集会、デモ、コンサートが不可能になってしまいました。

しかし、そんな状況下で、私たちにはまだ言葉という最も基本的で最も強力な連帯の手段が残されています。

『ペスト』のラストで疫病が終息したとき、人々はお祭り騒ぎで伝染病という災厄を忘れようとした。しかし、『ペスト』は、そうした人間中心主義の忘却に逆らうために書かれた小説なのです。自分勝手な忘却に抗う手段は言葉です。言葉で認識と記憶を伝えることです。言葉を研究し、鍛える文学部は、まさにいまこそ必要とされる学問の場だというべきでしょう。



ガリマール社刊『ペスト』、カミュと恋人の女優マリア・カザレスとの『往復書簡集』

悪夢とウイルス

心理学科 川寄克哲 教授



「無意識」という心の層を仮定する深層心理学という分野が心理学の中にあります。深層心理学派は夢という現象にとっても注目します。皆さんも思い当たるかと思いますが、何か怖いものに襲われる夢はとてもポピュラーです。たとえば、ナイフを持った男に追われるといった夢、あるいは、カプセルが割れて、中に入っていたウイルスが漏れて感染する恐怖に悲鳴をあげるといった夢などです。このような夢は現在世界を悩ませている新型コロナ禍以前から一般的によくみられる夢であり、つまりは、単に現実での不安を反映しているのではなく、夢見手の心の中にある何かの課題がこのようなイメージで現れたものだと考えられます。通常、このような怖い夢は悪夢だと捉えられ、どうにかナイフを持った男から逃げ切ったり、ウイルスの感染から免れることができた「あー、よかった」となるわけですが、深層心理学派の観点はこれとは少々異なります。

自分が自分だと思っている心の領域（つまり自我）からいわば“はみ出している”領域が無意識です。すなわち、意識＋無意識が心の全体だとすれば、意識という領域は心の一部に過ぎないわけです。そのような部分に過ぎない意識（自我）が何かちょっと勘違いして、肥大し変な状態になってくると、それを修正するべく、無意識が意識に対して“カウンター”を放ちます（正確に述べれば、意識が変化するという動的な状態を意識の側からみれば、異質で無意識的なものがカウンターを入れてくると映るわけです）。この状態が夢に現れるときさきほどのような「怖いものに襲われる夢」というイメージとなるわけです。この観点からすれば、「襲ってくる怖いもの」とは心の中の何か新しい可能性が生じてきて、これまでの自我のあり方を変化させる動きの表象にほかなりません。もっとも、私（自我）からすれば、それは私を造りかえるものなので、怖くて当然で抵抗も生じてきます。変容することには苦痛が伴い、象徴的には「死」ぬことと同じだからです。しかし、その「襲ってくる怖いもの」は新たな可能性でもあります。だからこそ、心理療法師はそのような夢を見て報告する患者さんに対して、怖く感じている「自我」を大事に見守りながらも一方では「襲ってくる怖いもの」を排除せず、それが夢見手に浸透することを期待している面もあるのです。

さて、「襲われる夢」に対するこのような見方は何かに似ていないでしょうか？ そう、これはまさしく、新型コロナウイルスに襲われている現在のわれわれの世界のあり方と非常に似ています。文明が過激に拡大していくことで、本来棲み分けていたはずの自然領域（たとえばアマゾンの森林）を侵食していき、気候も含めた多大な環境の変化をもたらします。かようなグローバリズムの進展によって、棲み分けていたはずの領域が侵犯されて、そこに棲む生物と人間とが接触する。すると、その生物の中で安住していたウイルスが新大陸としての人間世界へと冒険を挑むようになり、感染症が生じてきます。カウンターとしてのウイルス感染です。

すでに、「コロナを撲滅しよう」ではなく、「With コロナ」という重い文句が言われて久しいですが、疫学的な観点からすれば「With コロナ」の真の意味は、ウイルスが人間社会に浸透していき（感染していき）、その相互作用を通して免疫を獲得する人が増える中でウイルスが弱毒化して、現在の普通の風邪のようにウイルスと人間社会があるバランスを取った状態になるということにほかならない。もちろん、この過程には苦痛や死が必然的につきまとうわけで、それを決して軽視することはできません。しかし、この過程にはさきほど夢に関して述べたような「新たな可能性」も含まれているはずです。

実際、マクロな歴史学的視点からみれば、たとえば、中世ヨーロッパを襲ったペストはそれまでの社会のあり方を根底から揺るがし、ルネッサンスの登場をもたらした大きな要因となりました。また、ミクロな生物学的視点からみれば、ウイルス感染は本来異なる生物種というハードルを越えての遺伝子の交換がときに生じます（「遺伝子の水平移行」）。たとえば、われわれ人間を含めた哺乳動物は胎盤や目をもっていますが、それらは遥か過去にウイルスがもたらしたものです（たとえば、目を形成する遺伝子は植物の葉緑素を作る遺伝子に由来しています）。

もちろん、個として生きる人間として当然われわれはウイルスに感染したくはないし、感染しないように気をつけなければなりません。しかし、一方で上記のように、ウイルス（≒無意識）を含めた全体としての生態系に思いを馳せ、その部分であるわれわれ人間、ひいては個々の私（≒自我）にとってウイルスがもつ意味を大きな文脈のなかで眺め、頭の片隅に置いておくことは案外大事なことだと思っています。

新しい発見と収穫

教育学科 梅野正信 教授

教育学科に赴任し、書籍の研究室搬入を終えたのが2020年の4月3日。すぐに緊急事態宣言（4月7日）となる。Zoomを試し、WebClassの活用方法を理解したところで、講義資料のpdf化が不可欠と気付いた。資料を撮影してpdfに変換し、パワーポイントに説明を組み入れる作業に追われ、慌ただしかった。だが、この時の体験が、私自身の教育と研究に大きく役立つことになる。驚きであり、望外の収穫だった。

まずもっての収穫は、研究意欲である。COVID-19感染拡大下でのZoom講義。それでも、私の質問に、チャットで懸命に応答しようとする学生たちの姿は、感動的だった。講義のあと、質問に残った学生との対話も、存外楽しかった。学生たちの姿に向かい合うことで、研究を止めてはならないのだと、思っていた。

第二の収穫は、代表をつとめる共同研究「日韓の歴史教科書及び博物館歴史展示における日本による植民地期間関係記述の比較研究」（科学研究費・基盤B・2019-22）の推進、である。日韓の大学教員ら20人近くが参加する共同研究だが、2月以降の活動が止まってしまう、責任を痛感していた。だが、講義で学生たちに語りはじめた頃から、研究再開への意欲が湧き出てきた。不思議なものである。教育と研究が密接に繋がっていると実感した瞬間だった。

第三の収穫は、研究の再開に、講義の経験がそのまま活かされたことだ。各大学で打ち込んだデータをエクセルに随時統合して共有し、定期的にZoomで意見交換をするという研究スタイルは、講義用に揃えたワイドディスプレイで苦も無く比較できた。また、学習院が教員個人に提供してくれたライセンスのおかげで、韓国の研究者をまじえた意見交換を、必要な時にいつでも開催できた。そして何より、この研究スタイルを、COVID-19下を共通に体験した研究者全員が、違和感なく受容できたことも、大きかった。

大学に行けずみんなと 会えぬまま 数えてみれば もう四か月
昼休み さくらラウンジ 行きたいよ みんなの笑顔 思い出される
画面越しに 友にまみえて 電源を 落とした後の 部屋の静けさ
オンライン 見つめる先に 人居らず 虚しさ残り 友が恋しい
コロナ禍で 前代未聞の 課題量 夏休みなんて あるのかしら
ディスタンス 守れば守れど 一人きり 気づけば心の 距離も離れる
常日頃 忙殺られし 我が親の 予定帳今は 真っ白になりて
コロナ禍に 歴史の反復 我は見る 過去の先人 いかに乗り越えん
感染の 拡大原因 若者に 押し付け 非難する 世の大人
思いがけず 未曾有の病に 罹るとき 真に問われし 人の在り方
対面で 親しい人に 会いたいが いつ会えるのか 考える日々

文学部/IN
法学部/FU
文学部/OY
文学部/MR
文学部/OT
文学部/NM
文学部/OY
文学部/KM
経済学部/OS
文学部/MK
法学部/XY

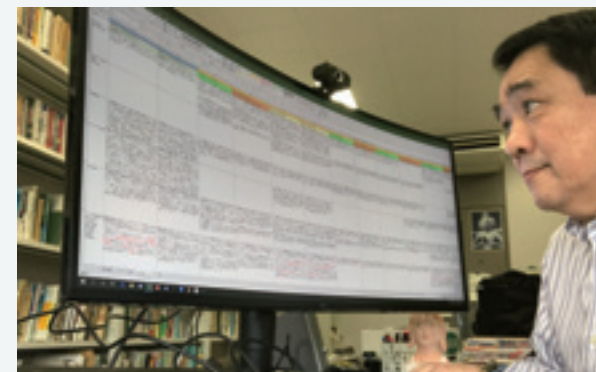
「自分が感じていた不安を他の学生も感じていることがわかってすごく共感できました」「会えなくてもみんな考えていることや感じていることは一緒なんだと感じました」「一人じゃないということに不思議なくらい安心した」「皆同じ時を生活しているのだなと痛感した」。

パンデミック下の教育と研究は、確かに苦難の連続だった。しかしそれ以上に、新しい発見と収穫の時でもあったように思う。

2020年9月、新入生である教育学科1年生のためにガイダンスを実施した。担当された先生をはじめ、教育学科の教員が一丸となって運営にあたり、笑顔で1年生を迎えた。

2年生からビデオメッセージも映し出され、大きな拍手があがった。

2021年度は、学生にとっても、教員にとっても、新たな、素晴らしい出会いの年となることを願いたい。



ワイドディスプレイで大量のデータを比較

最後に、何よりの収穫は、学生がいてこそこの大学であると、あらためて気付かされたことだ。教材開発・授業開発に取り組む講義では、『昭和万葉集』（1980）などをあげて、現代社会の課題と接点を持つ教材について、説明する。いつものように、出席代わりに、「いまの気持ちを、詠んでみましょう」とお願いした。今回はチャット機能で書き込んでもらった。その一部、掲載の承諾をいただいた作品をあげてみたい。（著者名はご本人に了承を得た表記にしている）

PDF1枚に一首ずつ記載して、無言で開いていた。最後まで終わると、チャットで感想が届き始める。その言葉もまた、胸をうつものだった。



2020年9月開催の教育学科2学期ガイダンス 学生たちの喜びの表情に大学は学生たちのものと実感